

第2次広島市環境基本計画に掲げる主な指標等の状況等一覧

○ 実績は、令和元年度（令和元（平成31）年）のものである（令和元年度（令和元（平成31）年）実績が把握できない指標については、直近で判明している数値を〔 〕内に記載している。）。
○ 計画策定時の数値と比較し、目指すべき方向に向かっている指標は矢印を赤で、向かっていない指標は青で、数値を把握できない指標はグレーで示している。

区分	項目番号	計画策定時		令和元年度 令和元（平成31）年 実績値	目指すべき方向	実績値の推移	要因等	関連事業 関連施策
		基準年度	数値					
「第1節 豊かな自然環境の保全」に関して参考となる主な指標等								
健全な水循環の確保	1	平成26年度	3.2%	2.6%	減少	<p>3.2% 3.1% 2.6% 2.6% 2.6%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 広島市水道ビジョンに基づき、老朽化や事故履歴、配水管腐食状況等を踏まえた配水管路の更新を行った。 漏水防止調査（道路内の配水管から水道使用者の敷地内にある水道メーターの間に漏水がないか確認する調査）を行い、漏水箇所の修理を行った。 漏水率は、年間漏水量÷年間給水量で求められる。令和元年度は、年間漏水量3,440,853m³÷年間給水量133,798,027m³≒2.6% となっている。 	水道施設における漏水の防止
	2	平成26年度末	約30%	約45%	増加	<p>30% 35% 37% 41% 45%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 下水道法に定められた事業計画などに基づき、雨水幹線などの浸水対策施設の整備を行った。 浸水常襲地区とは、中心市街地において深刻な浸水被害が発生している地区約2,000haであり、雨水幹線の整備対象となっている地域（約2,600ha）の一部である。 床上・床下浸水解消率とは、浸水常襲地区のうち、浸水対策施設の整備により床上・床下浸水が解消された地域の面積の割合をいう。 	下水道による浸水対策
緑の保全	3	平成25年	60,501ha	60,337ha	維持	<p>60,501ha 60,337ha</p> <p>計画策定時 平成30年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 平成26年度から平成30年度の5年間で開発行為等により森林面積が164ha減少した。 〔取組〕 森林造成事業（森林所有者等が市内の山林において行う人工造林等の森林施業に対する助成を行う事業）や里山林再生整備事業（町内会等が手入れの不十分な農山村地域や都市近郊の里山林で実施する事業に対する助成を行う事業）などに取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 森林造成事業 里山林再生整備事業
	4	平成26年度	287ha	277ha	増加	<p>287ha 326ha 302ha 330ha 277ha</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 人工林の中で保育間伐の必要な35年生以下の森林の割合が減少し、搬出間伐を実施する36年生以上の森林の割合が増加しているため、間伐のための作業道の開設や搬出作業など、間伐を行うための作業が多くなり、間伐そのものの面積は少なくなっている。 〔対策〕 今後も間伐等の人工林の適切な管理について、林業事業者及び地元自伐林業団体と連携して推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 人工林健全化推進事業 森林造成事業 森林機能保全間伐対策事業
	5	平成22年	242人	〔230人〕 （平成27年）	増加	—	<ul style="list-style-type: none"> 現在、調査中であるため。（調査は5年毎） 〔取組〕 森林所有者や地域住民による自伐林業を支援し、林業に携わる人材の育成を行っている（中山間地域自伐林業支援事業）ほか、平成29年度から林業を行いながら他の仕事でも収入を得る半林半X（エックス）移住者支援事業を開始している。 	<ul style="list-style-type: none"> 中山間地域自伐林業支援事業 半林半X移住者支援事業
	6	平成26年度	7,039人	3,891人	増加	<p>7,039人 5,290人 7,211人 2,967人 3,891人</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 森林に関する知識や林業技術習得のための講習会を開催し、安全かつ適切な森林整備活動及び市民参加の森林づくりを継続的に展開していくための先導的役割を果たすボランティアの育成やボランティア活動に対する助成を行い、森林ボランティア活動を推進しているが、平成30年7月豪雨の影響による臨時休園期間及び部分開園期間があり森林公園でのボランティア活動が困難となったことや、イベント開催日の天候不良により、活動者数が減少した。 〔対策〕 パンフレットやチラシなど効果的な広報により事業の周知を行うとともに、育成したボランティアに対し情報発信を行い、活動機会を提供する。 	<ul style="list-style-type: none"> 森林・林業体験活動支援事業 市民協働森づくり支援事業 市民参加の森林づくり事業
	7	平成22年	1,931ha	〔1,721ha〕 （平成27年）	増加	—	<ul style="list-style-type: none"> 現在、調査中であるため。（調査は5年毎） 〔取組〕 農業委員会や農地中間管理機構（農用地等を預かり、農業の担い手に貸し付ける仲介を行う団体。都道府県ごとに設置されている。）と連携を図りながら、新規就農者等への農地集積の促進等を行っている。 	新規就農者等への農地集積の促進
	8	平成22年	495ha	〔492ha〕 （平成27年）	減少	—	<ul style="list-style-type: none"> 現在、調査中であるため。（調査は5年毎） 〔取組〕 “ひろしま活力農業”経営者育成事業（栽培・経営技術等の研修及び経営初期の支援を行い、若い活力ある農業経営者を育成する事業）や、「スローライフで夢づくり」新規就農者育成事業（定年退職後等に就農を希望する農地を持たない市民を対象に、1年間の栽培・経営技術等の研修及び農地のあっせんなどの支援を行い、生産販売農家として育成する事業）、ふるさと帰農支援事業（農家出身者で定年退職後に帰農を目指す市民を対象に、1年間の栽培・経営技術等の研修を行い、生産販売農家として育成する事業）及び“チャレンジ”女性農業者育成事業（市内の農家女性を対象に、野菜や花・農産物加工など、1年間の栽培・経営技術等の研修を行い、生産販売農家として育成する事業）などにより、農業従事者数の増加に取り組んでいる。 	中山間地域等の農用地に係る所得補償

区分	項目番号	計画策定時		令和元年度 令和元(平成31)年 実績値	目指すべき方向	実績値の推移	要因等	関連事業 関連施策	
		基準年度	数値						
2 緑の保全	農業従事者数(販売農家)	9	平成22年	5,531人	〔3,971人 (平成27年)〕	増加	—	・現在、調査中であるため。(調査は5年毎) 〔取組〕 ・“ひろしま活力農業”経営者育成事業(栽培・経営技術等の研修及び経営初期の支援を行い、若い活力ある農業経営者を育成する事業)や、「スローライフで夢づくり」新規就農者育成事業(定年退職後等に就農を希望する農地を持たない市民を対象に、1年間の栽培・経営技術等の研修及び農地のあっせんなどの支援を行い、生産販売農家として育成する事業)、ふるさと帰農支援事業(農家出身者で定年退職後に帰農を目指す市民を対象に、1年間の栽培・経営技術等の研修を行い、生産販売農家として育成する事業)及び“チャレンジ”女性農業者育成事業(市内の農家女性を対象に、野菜や花・農産物加工など、1年間の栽培・経営技術等の研修を行い、生産販売農家として育成する事業)などにより、農業従事者数の増加に取り組んでいる。	・“ひろしま活力農業”経営者育成事業 ・「スローライフで夢づくり」新規就農者育成事業 ・ふるさと帰農支援事業 ・“チャレンジ”女性農業者育成事業
	認定農業者、新規就農者、女性農業士等の育成人数	10	平成26年度	329人	454人	増加	<p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	・“ひろしま活力農業”経営者育成事業や、「スローライフで夢づくり」新規就農者育成事業、ふるさと帰農支援事業及び“チャレンジ”女性農業者育成事業などの各種育成事業の成果が表れた。	・“ひろしま活力農業”経営者育成事業 ・「スローライフで夢づくり」新規就農者育成事業 ・ふるさと帰農支援事業 ・“チャレンジ”女性農業者育成事業
3 生物の多様性の確保	絶滅のおそれのあるもの	11	平成18年	269種	—	減少(絶滅のおそれなくなる)	—	・調査未実施のため、把握できない。 〔取組〕 ・一定規模以上の開発事業等において、事業者による環境影響評価が適切に行われ、絶滅のおそれのある生物への影響の回避、低減等が図られるよう、法令に基づく制度の適正な運用に努めている。	・野生生物に関する調査 ・希少生物の保護に関する調査等
	環境指標種	12	平成18年	49種	—	—	—	・調査未実施のため、把握できない。 〔取組〕 ・一定規模以上の開発事業等において、事業者による環境影響評価が適切に行われ、自然環境への影響の回避、低減等が図られるよう、法令に基づく制度の適正な運用に努めている。 〔参考〕 ・環境指標種とは、生息・生育に特定の環境条件が必要であり、環境の変化を顕著に反映することから、その存在が環境条件の指標となる生物種をいう。	・野生生物に関する調査 ・希少生物の保護に関する調査等
	かき(殻付き)養殖生産量	13	平成25年	21,770t	〔21,804t (平成30年)〕	増加	<p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度</p>	〔取組〕 ・国の研究機関及び広島県等と連携してかきの採苗調査を実施し、その調査結果を踏まえたかき養殖業者の指導・支援を実施するとともに、海水の含有物質(窒素、りん)の調査を行い、より効果的な採苗確保策を検討している。	・かき養殖業の振興 ・広島かき採苗安定強化事業
	イノシシ等による農林業等に係る被害額	14	平成26年度	4,713万円	4,482万円	減少	<p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	・広島市鳥獣被害防止計画などに基づき、イノシシ、ニホンジカ、ニホンザル等の有害鳥獣の捕獲・駆除等の被害対策を行い、また、鳥獣害緩衝帯整備により、野生鳥獣との共存、棲み分けを行った結果、計画策定時に比べて被害額は減少した。	・野生鳥獣による被害への対策 ・鳥獣被害防止のための森林整備の推進
4 自然との触れ合いの推進	自然との触れ合い施設等の利用者数(合計)	15	平成25年度	1,195,088人	1,032,415人	増加	<p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	・平成30年7月豪雨の影響により臨時休園期間及び部分開園期間があったこと、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため利用控えがあったことから、利用者数が減少した。 〔対策〕 ・集客力のある魅力的なイベントの開催、他施設との連携、パンフレット・チラシ等による効果的な宣伝広報などを行い、入場者数の増加につなげていく。 〔参考〕 ・「自然との触れ合い施設等」とは、森林公園、安佐動物公園、植物公園、花みどり公園、青少年野外活動センター、こども村及び少年自然の家・グリーンスポーツセンターをいう。	・森林公園自然体験活動推進事業 ・安佐動物公園自然体験活動等
	自然との触れ合い事業の参加者数(合計)	16	平成25年度	48,140人	26,558人	増加	<p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	・平成30年7月豪雨の影響により臨時休園期間及び部分開園期間があったこと、新型コロナウイルス感染症対策のためイベント自粛期間があったことから、活動者数が減少した。 〔対策〕 ・小学校や幼稚園等に声かけを行い、自然体験活動を推進する。 〔参考〕 ・「自然との触れ合い事業」とは、森林公園自然体験活動推進事業、里山あーと村、安佐動物公園自然体験活動、植物公園自然体験活動、太田川流域振興交流会議、広島地球ウォッチングクラブ及び子どもの自然体験事業をいう。	・森林公園自然体験活動推進事業 ・安佐動物公園自然体験活動 ・太田川流域振興交流会議における自然環境保全に関する事業 ・広島地球ウォッチングクラブの運営等

区分	項目番号	計画策定時		令和元年度 令和元(平成31)年 実績値	目指すべき方向	実績値の推移	要因等	関連事業 関連施策
		基準年度	数値					
「第2節 自然と調和した快適な都市環境の創造」に関して参考となる主な指標等								
1 水と緑を生かした潤いのあるまちづくりの推進	水辺のコンサートの観客数、水辺のオープンカフェの利用者数、水上交通の利用者数等の合計	17	平成26年度	29万5千人	43万7千人	増加	<p>295,000人 385,000人 430,000人 429,000人 437,000人</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p> <ul style="list-style-type: none"> 水辺のコンサートの実施回数の増加 水辺のオープンカフェの出店エリアの拡大(京橋川左岸) など 	「水の都ひろしま」づくりの推進
	河岸緑地の整備済延長	18	平成26年度末	26.2km	26.9km	増加	<p>26.2km 26.6km 26.7km 26.7km 26.9km</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p> <ul style="list-style-type: none"> 十分な予算を確保でき、河岸緑地を整備できた。 〔参考〕 河岸緑地は、水辺と緑地の連続性の確保などにより、都市に潤いを与える貴重なオープンスペースであり、地域の特性を生かした「水の都ひろしま」にふさわしい空間を整備するため、国及び県が実施する高潮対策事業と調整を図りながら、整備を進めている。 	河岸緑地の整備
	市街化区域における緑の面積の割合	19	平成19年度	18.3%	21.5%	維持	<p>18.3% 21.5%</p> <p>計画策定時 令和元年度</p> <ul style="list-style-type: none"> 市民やNPO、企業等と協働して潤いのある緑のまちづくりを推進できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 花と緑の広島づくりネットワークの展開 緑化推進制度の実施
	公園緑地面積	20	平成26年度末	962.2ha	986.6ha	増加	<p>962.2ha 983.0ha 984.2ha 985.2ha 986.6ha</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p> <ul style="list-style-type: none"> 帰属(開発行為)や施設整備により、公園緑地面積が増えた。 〔参考〕 広島市緑の基本計画において目標としている令和2年度の公園緑地面積1,000haを目指して、整備を推進している。 	公園緑地の整備
2 自然と調和した美しく品のある都市景観の創出	建築物等景観協議・届出累計件数	21	平成26年度末	10,496件	14,004件	増加	<p>10,496件 12,185件 12,856件 13,450件 14,004件</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p> <ul style="list-style-type: none"> 市民、事業者、行政が連携・協働して、本市の目指す「美しく品のある都市景観」を総合的かつ計画的に実現していくための景観形成の方針やルール、方策などを体系的に示した広島市景観計画(平成26年7月策定)等に基づき、届出制度等の運用を適正に行うことができた。 	広島市景観計画等による景観誘導
	クリーンボランティア参加者数	22	平成26年度	120,536人	113,278人	増加	<p>120,536人 111,989人 113,135人 115,044人 113,278人</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p> <ul style="list-style-type: none"> 門前清掃が市民生活に普及してきたこと等により、個人で清掃活動を行うケースが増えたことで、制度を利用した団体での清掃活動の機会が減少してきたことによるものと考えられる。 〔対策〕 「自分たちのまちは自分たちできれいにする」との考え方に立ち、市民が主体となった門前清掃や町内一斉清掃などのボランティア活動を支援し、ごみのないまちづくりを推進していくとともに、新たにSNSや市政出前講座も活用し、一層の制度の周知に努める。 	クリーンボランティア支援事業
	不法投棄件数	23	平成26年度	392件	85件	減少	<p>392件 153件 123件 115件 85件</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成25年度から平成27年度において、市街地周辺の不法投棄ごみの一斉撤去を行った。 一斉撤去後の再発防止策として平成26年度から夜間不法投棄防止パトロールを強化するとともに、平成27年度には地元からの要望に基づき監視カメラ等の設置を行った。 平成30年度及び令和元年度には、山間部において不法投棄ごみの撤去を行い、監視カメラ等を設置した。 	<ul style="list-style-type: none"> 不法投棄防止パトロールの実施 不法投棄防止キャンペーンの実施

区分	項目番号	計画策定時		令和元年度 令和元(平成31)年 実績値	目指すべき方向	実績値の推移	要因等	関連事業 関連施策
		基準年度	数値					
3 環境への負荷の少ない交通体系等の整備	公共交通機関全体の利用者数	24	平成25年度 56.8万人/日	〔59.9万人/日〕 (平成30年度)	増加	<p>60.0万人/日 60.7万人/日 59.9万人/日 56.8万人/日</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 公共交通の充実強化に向けて、長期展望を持って、路面電車やバスの定時性・速達性の確保や、郊外部におけるネットワークの確保などの課題解決に向けた取組を進めてきたこと等が近年の増加傾向につながっていると考えられる。 〔取組〕 各種施策により公共交通の利用の推進を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域公共交通再編実施計画の策定 路面電車LRT化の推進 JR可部線の輸送改善の推進 交通結節点における乗換利便性の向上 マイカー乗るまァデーの推進 パーク&ライドの推進 新交通西風新都線整備の推進 低公害バス車両購入費補助
	次世代自動車の登録台数割合	25	平成25年度 9.2%			22.1%	増加	<p>9.2% 16.6% 18.7% 20.6% 22.1%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>
4 つるま ちの環 境づく りの配 慮等に おけ	防災情報メール登録総件数	26	平成26年度末 69,042件	118,654件	増加	<p>69,042件 97,667件 105,533件 115,015件 118,654件</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 防災教室、出前講座、防災訓練、広報紙、広報番組、ホームページ等を通じた防災情報メールの登録促進や避難情報の入手方法の周知を行った。 防災情報メールへ登録しやすくするため迷惑メール設定解除方法を記載したリーフレットの配布を行った。 市内の乳幼児健診受診の際に保護者向けに配布した 市内携帯電話会社の店舗に配架した 	<ul style="list-style-type: none"> 広島市防災情報メールの登録促進

区分	項目番号	計画策定時		令和元年度 令和元(平成31)年 実績値	目指すべき方向	実績値の推移	要因等	関連事業 関連施策		
		基準年度	数値							
「第3節 健全で快適な生活環境の保全」に関して参考となる主な指標等										
1 大気環境の保全	大気汚染に係る環境基準達成率	二酸化硫黄	27	100% (4/4局)	100% (4/4局)	維持	<p>100% 100% 100% 100% 100%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 排出源である工場・事業場への立入検査、汚染物質排出量の調査等を行い、工場・事業場の排出基準の遵守の徹底を図ること等により、環境基準の維持に努めた。 【参考】 二酸化硫黄は、高濃度で呼吸器に影響を及ぼすほか、森林や湖沼などに影響を与える酸性雨の原因物質になると言われている。 大気汚染の状況を、市内に設置した4局の一般環境大気測定局で常時監視するとともに、公表した。 	<ul style="list-style-type: none"> 大気汚染の状況の監視 大気汚染の防止に関する工場・事業場への立入検査等 	
		二酸化窒素	28	100% (11/11局)	100% (11/11局)	維持	<p>100% 100% 100% 100% 100%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 排出源である工場・事業場への立入検査、汚染物質排出量の調査等を行い、工場・事業場の排出基準の遵守の徹底を図ること等により、環境基準の維持に努めた。 【参考】 二酸化窒素は、高濃度で呼吸器に影響を及ぼすほか、酸性雨及び光化学オキシダントの原因物質になると言われている。 大気汚染の状況を、市内に設置した7局の一般環境大気測定局及び4局の自動車排出ガス測定局で常時監視するとともに、公表した。 	<ul style="list-style-type: none"> 大気汚染の状況の監視 大気汚染の防止に関する工場・事業場への立入検査等 	
		一酸化炭素	29	100% (2/2局)	100% (2/2局)	維持	<p>100% 100% 100% 100% 100%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> ステッカー配布などのアイドリング・ストップの啓発活動を行うこと等により、環境基準の維持に努めた。 【参考】 一酸化炭素は、血液中のヘモグロビンと結合して、酸素を運搬する機能を阻害する等の影響を及ぼすほか、温室効果ガスである大気中のメタンの寿命を長くすることが知られている。 大気汚染の状況を、市内に設置した2局の自動車排出ガス測定局で常時監視するとともに、公表した。 	<ul style="list-style-type: none"> 大気汚染の状況の監視 アイドリングストップ運動の推進 	
		浮遊粒子状物質	30	平成26年度	100% (11/11局)	100% (11/11局)	維持	<p>100% 100% 100% 100% 100%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 排出源である工場・事業場への立入検査、汚染物質排出量の調査等を行い、工場・事業場の排出基準の遵守の徹底を図ること等により、環境基準の維持に努めた。 【参考】 浮遊粒子状物質は、大気中に長時間滞留し、高濃度で肺や器官等に沈着して呼吸器に影響を及ぼす。 大気汚染の状況を、市内に設置した7局の一般環境大気測定局及び4局の自動車排出ガス測定局で常時監視するとともに、公表した。 	<ul style="list-style-type: none"> 大気汚染の状況の監視 大気汚染の防止に関する工場・事業場への立入検査等
		PM2.5 (微小粒子状物質)	31		25% (2/8局)	100% (11/11局)	増加	<p>25% 73% 73% 100% 100%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 排出源である工場・事業場への立入検査、汚染物質排出量の調査等を行い、工場・事業場の排出基準の遵守の徹底を図ること等により、環境基準の維持に努めた。 【参考】 PM2.5(微小粒子状物質)は、粒径が2.5μm以下と小さな粒子であるため、肺の奥まで入りやすく、肺がん、呼吸器への影響に加え、循環器系への影響が懸念されている。 大気汚染の状況を、市内に設置した7局の一般環境大気測定局及び4局の自動車排出ガス測定局で常時監視するとともに、公表した。 	<ul style="list-style-type: none"> 大気汚染の状況の監視
		光化学オキシダント	32		0% (0/7局)	0% (0/7局)	増加	<p>0% 0% 0% 0% 0%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 主な原因物質である窒素酸化物や揮発性有機化合物の排出削減対策が進められているものの、既存の排出削減対策では環境基準の達成は全国的に厳しい状況である。光化学オキシダントの生成機構は複雑であることから、効果的な追加対策の検討が環境省において進められているところである。 【対策】 主な原因物質の発生源となる工場・事業場への立入検査、大気汚染物質排出量の調査等を行い、工場・事業場の排出基準の遵守の徹底を図ること等により、引き続き、光化学オキシダントの発生抑制に努めていく。 【参考】 光化学オキシダントは、いわゆる光化学スモッグの原因となり、高濃度では粘膜を刺激し、呼吸器への影響を及ぼすほか、農作物など植物への影響も観察されている。 大気汚染の状況を、市内に設置した7局の一般環境大気測定局で常時監視するとともに、公表した。 平成3年度から平成30年度間の光化学オキシダント濃度の長期トレンドを示す新指標(平成28年2月17日付 環境省水・大気環境局大気環境課長通知で示された光化学オキシダントの環境改善効果を適切に示すための指標、測定局別日最高8時間値の年間99パーセンタイル値の3年移動平均値)については、横ばい傾向である。 	<ul style="list-style-type: none"> 大気汚染の状況の監視

区分	項目番号	計画策定時		令和元年度 令和元(平成31)年 実績値	目指すべき方向	実績値の推移	要因等	関連事業 関連施策		
		基準年度	数値							
2 水環境・土壌環境の保全	汚水処理人口普及率	33	平成26年度末	95.1%	96.8%	増加	<p>95.1% 95.9% 96.5% 96.6% 96.8%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 公共下水道の整備の促進により、処理開始区域が増加した。 〔参考〕 汚水処理人口普及率は、汚水処理区域人口（公共下水道、農業集落排水処理施設、市営浄化槽を利用している人口の総和）÷行政区域人口で求められ、平成31年度は、汚水処理人口1,156,079人÷行政区域人口1,194,330人＝96.8%となっている。 	・汚水処理施設の整備等	
	水質汚濁に係る環境基準達成率	人の健康の保護に関する項目（河川）	34	平成26年度	100% (27/27地点)	100% (27/27地点)	維持	<p>100% 100% 100% 100% 100%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 排出源である工場・事業場へ立入検査、汚濁物質排出量の調査等を行い、工場・事業場の排水基準の遵守の徹底を図ること等により、環境基準の維持に努めた。 〔参考〕 市内の河川27地点で水質の汚濁の状況を常時監視するとともに、公表した。 	<ul style="list-style-type: none"> 水質汚濁等の状況の監視 水質汚濁の防止に関する工場・事業場への立入検査等
		人の健康の保護に関する項目（海域）	35		100% (8/8地点)	100% (8/8地点)	維持	<p>100% 100% 100% 100% 100%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 排出源である工場・事業場へ立入検査、汚濁物質排出量の調査等を行い、工場・事業場の排水基準の遵守の徹底を図ること等により、環境基準の維持に努めた。 〔参考〕 市内の海域8地点で水質の汚濁の状況を常時監視するとともに、公表した。 	<ul style="list-style-type: none"> 水質汚濁等の状況の監視 水質汚濁の防止に関する工場・事業場への立入検査等
		生活環境の保全に関する項目（河川のBOD）	36		100% (20/20水域)	100% (20/20水域)	維持	<p>100% 100% 100% 100% 100%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 排出源である工場・事業場へ立入検査、汚濁物質排出量の調査等を行い、工場・事業場の排水基準の遵守の徹底を図ること等により、環境基準の維持に努めた。 〔参考〕 BOD（生物化学的酸素要求量）とは、バクテリアが一定時間内に水中の有機物を酸化・分解するのに必要な酸素の量であり、有機汚濁に関する河川の代表的な水質指標として用いられる。値が大きいほど、汚濁度が高いことを示す。 市内の河川20水域で水質の汚濁の状況を常時監視するとともに、公表した。 	<ul style="list-style-type: none"> 水質汚濁等の状況の監視 水質汚濁の防止に関する工場・事業場への立入検査等
		生活環境の保全に関する項目（海域のCOD）	37		0% (0/4水域)	0% (0/4水域)	増加	<p>0% 0% 0% 0% 0%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 生活排水や工場排水の影響により、環境基準以下に抑えることができなかった。 〔対策〕 COD及びびCODの増加に寄与する窒素とりの削減を引き続き、工場・事業場に指導していく。 〔参考〕 COD（化学的酸素要求量）とは、酸化剤により水中の有機物を酸化・分解するのに必要な酸素の量であり、有機汚濁に関する海域の代表的な水質指標として用いられる。値が大きいほど、汚濁度が高いことを示す。 市内の海域4水域で水質の汚濁の状況を常時監視するとともに、公表した。 	<ul style="list-style-type: none"> 水質汚濁等の状況の監視 水質汚濁の防止に関する工場・事業場への立入検査等
3 有害化学物質対策の推進	有害化学物質に係る環境基準達成率	38	平成26年度	100% (30/30地点)	100% (29/29地点)	維持	<p>100% 100% 100% 100% 100%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 排出ガス等のダイオキシン類について、設置者から提出された自主測定の結果を基に、工場・事業場への立ち入り検査を行い、排出基準の遵守を図ると共に指導を行った。 〔参考〕 ダイオキシン類の大気・水質・底質・地下水及び土壌の環境調査を実施し、調査結果を公表した。 	・ダイオキシン類の濃度の監視	
	有害大気汚染物質			39	100% (5/5地点)	100% (4/4地点)	維持	<p>100% 100% 100% 100% 100%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 有害大気物質を使用する特定事業場に対して、適正な管理を指導している。 〔参考〕 有害大気汚染物質とは、低濃度であっても長期間の暴露により人の健康に影響を及ぼすおそれの高い物質であり、当指標においては、ベンゼン、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン及びジクロロメタンをいう。 市内4地点で有害大気汚染物質による大気汚染の状況を常時監視するとともに、公表した。 	・有害大気汚染物質による汚染の状況の監視

区分	項目番号	計画策定時		令和元年度 令和元(平成31)年 実績値	目指すべき方向	実績値の推移	要因等	関連事業 関連施策	
		基準年度	数値						
4 騒音・振動の防止	騒音に係る環境基準達成率	自動車騒音	40	95% (約10万5千/ 約11万戸)	96% (約14万3千/ 約14万9千)	増加	<p>95% 96% 96% 97% 96%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 騒音に係る環境基準が達成されていない地点については、道路管理者等に騒音対策の実施への配慮を求めた。 〔参考〕 市内29地点で自動車騒音の状況を測定し、その結果を基に幹線道路沿いの住民ごとに評価し、公表した。 	<ul style="list-style-type: none"> 自動車騒音等の状況の監視 道路交通騒音・振動対策の推進
		鉄道騒音（新幹線）	41	67% (8/12地点)	75% (9/12地点)	増加	<p>67% 67% 67% 67% 75%</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 騒音に係る環境基準が達成されていない地点については、鉄道事業者に騒音対策の実施への配慮を求めた。 〔参考〕 市内3か所12地点で鉄道騒音の状況を測定するとともに、公表した。 	<ul style="list-style-type: none"> 鉄道騒音・振動対策の推進
5 推進 ゼロエミッションシティ 広島の	1人1日当たりのごみ排出量 (ごみ総排出量)	42	平成26年度	864g/人日 (374,858t/年)	853g (373,216t/年)	減少	<p>864g/人日 841g/人日 848g/人日 850g/人日 853g/人日</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 事業系ごみの排出量が増加したものの、家庭ごみの排出量は減少しており、全体として計画策定時に比べて減少した。 	<ul style="list-style-type: none"> ごみの減量・リサイクルに関する広報の充実
		産業廃棄物最終処分量	43	平成25年度	8.9万t/年	9.3万t/年	減少	<p>8.9万t/年 9.3万t/年</p> <p>計画策定時 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 排出量が最も多い汚泥については減少傾向にあるものの、がれき類、廃プラスチック類等の増加により全体としてやや増加した。

区分	項目番号	計画策定時		令和元年度 令和元(平成31)年 実績値	目指すべき方向	実績値の推移	要因等	関連事業 関連施策		
		基準年度	数値							
「第4節 地球環境の保全への貢献」に関して参考となる主な指標等										
1 地球温暖化対策の推進	温室効果ガス排出量	44	平成24年度	879.2万t-CO ₂	〔776.2万t-CO ₂ 〕 (平成30年度速報値)	減少	<p>820.4万t-CO₂ (2018), 817.9万t-CO₂ (2019), 776.2万t-CO₂ (速報値) (2023)</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 主に温室効果ガス全体の半分以上を占める民生・家庭部門及び民生・業務部門の排出量が減少したことにより、全体の排出量は減少した。 <p>〔参考〕</p> <ul style="list-style-type: none"> 事業活動環境配慮制度とは、一定規模以上の事業者を対象に、温室効果ガスの削減目標や排出抑制対策を内容とする事業活動環境計画書及び事業活動環境報告書の作成、提出及び公表を義務付け、市においてその概要を公表するとともに、取組内容を評価する制度である。 低炭素集合住宅建築補助とは、低炭素化の図られた集合住宅の住戸部分の全てについて、都市の低炭素化の促進に関する法律に基づき、市長から低炭素建築物新築等計画の認定を受けた集合住宅を建築し、販売する事業を行う建築主に対し、補助を行う制度である。 	<ul style="list-style-type: none"> 事業活動環境配慮制度の運用 低炭素集合住宅建築補助 	
	エネルギー使用量（原油換算）	45	平成24年度	302.1万kℓ	〔284.4万kℓ〕 (平成30年度速報値)	減少	<p>302.1万kℓ (2012), 285.7万kℓ (2018), 288.8万kℓ (2019), 284.4万kℓ (速報値) (2023)</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 主に運輸部門及び民生部門（家庭・業務）のエネルギー使用量が減少したことにより、全体の使用量は減少した。 	<ul style="list-style-type: none"> 事業活動環境配慮制度の運用 低炭素集合住宅建築補助 	
	中国電力株式会社のCO ₂ 実排出係数	46	平成26年度	0.706kg-CO ₂ /kWh	〔0.618kg-CO ₂ /kWh〕 (平成30年度)	減少	<p>0.706kg-CO₂/kWh (2014), 0.691kg-CO₂/kWh (2018), 0.669kg-CO₂/kWh (2019), 0.618kg-CO₂/kWh (2023)</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> CO₂実排出係数が石油・石炭に比べて低いLNG（液化天然ガス）の利用拡大、火力発電所熱効率の向上、水力・太陽光・風力等の再生可能エネルギーの利用拡大・普及促進等の理由により、CO₂実排出係数は減少した。 <p>〔参考〕</p> <ul style="list-style-type: none"> エネルギー環境配慮制度とは、本市の区域内に電気を供給する小売電気事業者を対象に、再生可能エネルギーの導入割合等の目標などを内容としたエネルギー環境計画書及びエネルギー環境報告書の作成、提出及び公表を義務付け、市においてその概要を公表する制度である。 	<ul style="list-style-type: none"> エネルギー環境配慮制度の運用 	
2 オゾン層の保護	大気中のフロン濃度	CFC11	47	0.27ppb	0.24ppb	減少	<p>0.27ppb (2012), 0.27ppb (2018), 0.24ppb (2019), 0.23ppb (2023), 0.24ppb (2024)</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 家庭用のエアコンディショナー及び電気冷蔵庫の冷媒用フロン類については、特定家庭用機器再商品化法（家電リサイクル法）に基づき、製造業者等による回収や破壊を推進した。 カーエアコンのフロン類の適正回収・破壊を推進するため、使用済自動車の再資源化等に関する法律（自動車リサイクル法）に基づき、登録業者の指導や監視を行った。 オゾン層保護推進月間（9月）のポスター掲示を行った。 <p>〔参考〕</p> <ul style="list-style-type: none"> 大気環境中のフロンの状況を把握するため、平成3年度から大気中のフロン濃度の調査を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> フロンの濃度の調査 フロン類の管理の適正化の推進 	
		CFC12	48	平成26年度	0.58ppb	0.52ppb	減少			<p>0.58ppb (2012), 0.60ppb (2018), 0.53ppb (2019), 0.51ppb (2023), 0.52ppb (2024)</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>
		CFC113	49	0.07ppb	0.065ppb	減少	<p>0.07ppb (2012), 0.07ppb (2018), 0.07ppb (2019), 0.064ppb (2023), 0.065ppb (2024)</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>			
3 酸性雨の防止	雨水の水素イオン濃度指数（pH）平均値	50	平成26年度	4.49	4.57	上昇 (酸性化の緩和)	<p>4.49 (2012), 4.78 (2018), 4.89 (2019), 4.63 (2023), 4.57 (2024)</p> <p>計画策定時 平成28年度 平成29年度 平成30年度 令和元年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 酸性雨の原因である硫黄酸化物や窒素酸化物の排出抑制のための取組を進めるため、排出源である工場・事業場への汚染物質排出量の調査等を行い、工場・事業場の排出基準の遵守の徹底を図った結果、計画策定時と比べて上昇した。 	<ul style="list-style-type: none"> 酸性雨の状況の調査 	